



Title	夏に想う
Author(s)	岡本, 好勝
Citation	makoto. 1976, 15, p. 4-4
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86201
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

夏に想う

高槻市衛生部長

岡本好勝

今年も、蚊発生シーズンの夏がやって来た。防疫担当者にとっては、この時期が、一年中で一番忙しい季節である。「蚊」「はえ」「毒蛾」対策など、大量に発生する衛生害虫にたち向い、伝染病の発生——特に、予後の良くない恐しい日本脳炎の発生は、近年予防接種の普及と環境整備がなされて近時発生は殆んどないとは言うものの、絶対あつてはならない。こんな気持ちにかられる時期でもある。

ところで、大都市近郊のベクトタウンとして急速発展した本市のように、ここ十年ほどの間に、従前の人口の約二倍に近い人口増で、緑の山が宅地化され、田圃が埋め立てられ、しかも農地の中に虫食い状態で、住宅地が混在し、住宅地と農地との機能を併存せしめなければならぬような地域が、市域各所に生じることとなった。一方これに伴う都市施設の整備は追いつかず、特に下水道整備の遅れは、

家庭の雑排水路と農用水路を同一の水路でもって、使用していかなくてはならぬ、これらのことなどより旧来の市民と新しい市民との間に各種の問題が生じ、特に、蚊の駆除対策において大きなズレが生ずるに至った。

即ち、ボーフラ退治で水路に薬剤散布をすれば、流れている水路の場合、薬剤の効果的な問題があるとしても、これ以外に稲作用水の問題が生じ、田植時期から一定の期間は、散布まかりならないと言うこととなり、かと言って、何んらかの措置をしないでおけば、新興住宅地目ざして蚊の大軍が飛来してくる有様で、行政としては、住民の中に挟まれて立往生。網戸を入れ、昔のように蚊帳をつり、蚊取り線香をつけていただく仕方がないと言え、今の世の中ですんなこと、と行政の無策を攻められ、苦情に続く苦情である。

当時何んでそんな地域に家を建てたのかと、立売業者を恨めしく思ったものである。

人口急増ラッシュがくるまでは、蚊の駆除対策は、市街地のみを対象とすれば良く、田舎の水路は、魚がおつて、それが自然と駆除してくれた。との先輩の話。もう一度、自然な方法で即ち「ボーフラ」を魚が食ってくれないか。この方法であれば蚊の駆除は出来るし、農家にも問題が生じない。しかし都市化は、水路の汚だくを来たし、既に魚の住むようなものではなくなっている。しかし何んとかしなければいけない。このようなところから、取りあえず、特に苦情の多い南部地域の水路の実情調査を行なうこととした。

その結果、非常に水路の汚だくが激しく、「ボーフラ」すら生息しておらない水路。「ボーフラ」が大量に発生している水路、更には、まだメダカなど魚が住んでいて、「ボーフラ」は

見当らない水路、大別すれば以上水路を三分し得ることが分った。しかし、問題は、汚だくされた水路で生息出来、かつ「ボーフラ」を大量に食ひ、繁殖力の旺盛な理想の魚は、はたして存在しているのだろうか。こんな折も折一日に、ボーフラを三十二匹を毎日反復して食べ、かつ二十度以上の気温であれば、年に四〜五回、一匹で八十〜百匹前後産仔するアメリカ原産の、しかも汚水にも強い「タッブミノー」——「和名カダヤシ」の話を、防疫協会の一氏より聞かしていただいた。早速実験的に飼育されていた大阪府より、「タッブミノー」を分けていただき、今まで実態調査をしたそれぞれの水路の水で飼育し、「ボーフラ」を餌として与えてみた。一見「メダカ」のような形の「タッブミノー」は、予想どおり良く食べ、汚だくされた水でも死ぬことなく、水槽内で元気に泳ぎ廻り、中には今にも仔を産みそうな、大きな腹になってきたものもあった。首尾は上々、これで市民に対して、具体的な対策が説明し得る。

そこで、早速この方式で「ボーフラ」対策——蚊駆除対策を実施しようと、既に成功されて

いる徳島市にまいる、現地も見学をさせていただき、約千匹の「タッブミノー」をちょうだいし、市内五カ所の水路などに放流した。昭和四十七年九月のことであった。更に翌年においても、再度、徳島市のご好意により、更に約二千匹いただき放流した。放流後、効果判定調査と生存確認調査が続いている。生存している水路については、いづれも効果は上っているが、中には水質汚だくが進んだためか、死滅したと考えられる水路や、水路工事のために、他に流れていったのか、生存の確認されない水路もある。しかしそうでない場所においては、本市の水にもなれて、順調に育ち、かつ増え続けている。かかる上は、一日も早く徳島市のように、全市的に定着し、今後の蚊駆除対策の大きな武器の一つになるよう期待している。いづれにしても人工的な駆除対策は、即効的効果もあつて、今直ちに止めることは不可能ではあるが、今後において、これだけではなく、自然のサークルの中で、駆除対策が取れないものか、充分検討、研究すべきではなからうか。